KSKQ 第三種郵便物認可KSKQ（サロン・あべの）通巻1133号1995年5月1日

出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

Vol.106

サロン井戸端会議

サロン・あべの3月の出会い

95年3月18日（土）午後1時より、サロン・あべのの3月の出会いを開催した。今月は94年度最後の出会いということで、この1年を振り返りながら、参加者によるフリートーク、「サロン井戸端会議」を企画した。

まず、この1年間の毎月の出会いのテーマを黒板に書き、4月のスクーバ・ダイビングの話を皮切りにスタートした。

浜本さんから早川福祉会館の利用体験を聞かせていただいた後、設備の整ったこの会館が、阪神大震災で被災された重度障害者を受け入れていることから、話題は被災地の状況へ。地震発生当初から、ボランティアとして被災地に入り活動をされている窪田さんの体験談には、とても重みがあった。

次第に今月のタイトルどおり、井戸端会議に突入。それぞれに近くに座り合わせた人と話し込み、思い思いの話題に花が咲いていた。

また、各テーブルには、「サロン・あべの」紙のバックナンバーを創刊号から製本したものや、「いろはがるた」に使われた挿絵の原画（スケッチ）集などが回覧され、さらに会話を弾ませていた。

井戸端会議らしく結構騒がしい状況の中、吉田さんは、ときどき会話に「つっこみ」を入れながらも、淡々と似顔絵をかいておられた。また、初めて参加

大震災も話題に

かるたの原画に話の花

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

井戸端会議に手紙で こんにちは！

久しぶりの井戸端会議。ワチャワチャしゃべりたかったが、どうも時間のやりくりがつかなくて……

在宅ケアに思う

丸山　寿美子

高齢者夫婦の希望により、妻（84歳）の終末期介護に有志で取り組みました。

保健・福祉・医療・ボランティアの連携のもと、皆の協力で住み慣れた家で送日。

最後の数日は、病院で過ごされました。

その後を追うように94歳の夫も二ヵ月余りのち、天国の妻のお傍へ召されました。

この事例は、例外であるかも知れませんが・・・。在宅での看取りも可能であるこ

された永堀さんは手品を披露してくださった。

この日は、永堀さんをはじめ初参加の方も多かったが、自己紹介の時間も十分に取り、「サロン井戸端会議」は上々の成果を収めたようであった。

参加者24名。（上平幸雄）

吉田幾俊氏が画いた似顔絵
―― 井戸端会議で ――

と。又、私たちのめざす行動への自信と勇気。そして、これらを地域福祉にささげていけたらと思います。

サロンの出会いには参加出来なくとも、サロン紙で状況が手に取るように伝わります。毎回、心待ちに拝読しております。

運営委員の方々、これからもよろしく。

井戸端会議今昔

中野君江

「行ってきます」

ランドセルを背に外に出ると、近所のおばちゃん三人、帚を手におしゃべりをしている。朝一番、表の掃除から一日の生活が始まるパターン。

「行っといで、ハンカチ持った？」の声に私「行ってきます」の返事。

母が女の子だから表におばちゃん達が出ておられたら挨拶をするようにと口ぐせのように云われている。

又ある日、二人ほどのおばちゃんの中へもう一人増えた。手に小鉢をもっている。

「夕べの一品だけれど、おいしかったので一寸つまんで…」と指ばしで食べている。

近所の人の悪口を云うでもなし、ただ夕べの家の中の話に、たのしそうに時をすごしている。昭和十四～五年頃の話で子供心にも、大人って、何を話しているのかとも気にならなかった。

昭和二四～五年では、皆生活におわれているのか、表の掃除をする人も、そこそこに話し合う姿も、エプロン姿も見なくなった。

昭和三〇年の夏の頃、長男をつれ近くの公園に行くと、同年代の子供連れが集り、育児の事や離乳食の事などを話して勉強になっても、その辺りの住人とも、家族数の事や名前も知らないおつき合い。子供達の小学・中学と進むにつれ、ＰＴＡのお友達のふれ合いも多くなったが、各々家庭へ行ったり来たりはしない。

私方の息子二人も成人し結婚した今、親とは皆別居生活を始めている。ご近所の皆様方の子供さんも皆別居してしまい立派に独立、十軒の隣組の内、同居はない有様。

井戸端会議どころか、近頃はカルチャー通いのため、となり同志でも中々お顔を見る事もない昨今の生活。これでいいのか、悪いのか一寸さびしい限りです。

四十四歳

南光龍平

母が亡くなったのは、四十四歳のときでした。原因は「くも膜下出血」、脳出血のひとつです。私はそのとき十八歳、もう二十五年も前のことになりました。

私はこの八月で四十四歳。今年いっぱい元気で過ごせれば、母が生きた年月を私も生きることになるのです。

普段はもう、あまり母のことは思いを巡らせることもありませんが、ふと母が生きたのと同じ時間を過ごそうとしている自分を考えると、何となく不思議な気分に捕われてしまいます。随分、長く生きてきたものだという感慨、と言えばいささか大げさですがそんな気もしますし、逆に本当に若く短い母の一生だったんだなと、今更ながら思ったりもします。

子供が無いので「親の気持ち」が私には

よく分かりませんが、母から観て私はどんな子供だったのでしょうか。障害のこともあり、きっと心配の種だったことでしょう。

でも、もし今、四十四歳同志で母と会ったとしたら、カラオケなんかに誘われて母のほうがイマドキの歌をガンガン歌うだろう、と思います。そんな明るくてチャメッ気のある四十四歳の母が、今四十四歳を迎えようとする私のなかにいるのです。

「語り」について

南光仁子

私は今年の二月、奈良の「たんぽぽの家・わたぼうし語り部学校」を卒業しました。

そこはおもに言語障害のある人を対象として、その言語障害を自分の個性として語りに活かしていく指導方針を取っています。さすがに卒業間近になると、どの人もなかなかいい味を出して語れていると思いましたが、私のように言語障害の少ないものにとっては、なかなかいい味が出せないようです。

とにかく、ハートで語ることが大切だと教えてもらっています。でも、語っているときはとても楽しくて、時間の経つのを忘れるぐらいです。これから五年、十年とみっちり勉強して、本当に味のある語りを人々に聞いてもらえたら最高だと思います。

昔話を覚えたり、自作の物もやれたらいいなぁ、と夢も膨らみます。

私は年をとるごとに、幸せになりたいと思っていますので、好きな語りをやることで、ゆったり年をとっていけるような気がしています。さて、どうなるでしょう。

細く　長〜く

旭純子

サロンのある日の例会で、Ｏさんという視覚障害の方のお話が、とても印象的だった。

Ｏさんが建物内の廊下ですれ違った人に道を尋ねるとしばらくの沈黙の後、彼はＯさんの手をとって、Ｏさんの口元に当てがった…。

Ｏさんは、相手がろうあ者であることを知り、彼と握手をして別れた…という。

自分が手話を通じてろうあ者と交流を持ち、サロンで通訳をする関係もあって、心の底にじーんと浸み入るようなお話だった。

そのろうあ者は、Ｏさんが自分に話しかけるのを見て、とまどったに違いない。

そして、しばらく考えて自分がろうあ者であることを目の不自由なＯさんに知らせるために、Ｏさんの手を取ったのだろう。

その時の人気のない廊下で向いあったふたりの姿が目に浮かぶような気がした。

「あの時、相手のとっさの判断がなかったら、僕は無視されたと思い、腹を立てていただろう。」というＯさんの言葉に、目の不自由な人たちと、耳の不自由な方々との交流の難しさを改めて知らされたが、ぎこちない小さなふれあいの中から、ひとりひとりが何かを感じ取って、育ち合いのできるような交流を、大切にしていきたいと思う。

「いつまでも与えられるばかりでなく、自分達にできる何かをしていきたい。」という熱い思いを、主体的に運営していく実践力を秘めたサロンの仲間が持つパワーに圧倒されながらも、ボランティアとして車

イスを押し、手引きをし、通訳をするだけでなく、枠にとらわれない本音の交流をたいせつにしながら、彼らの思いを、パワーをみんなに伝えていきたい。

小さなふれあいの場＜サロン＞を通じて「共に生きる社会」作りの輪が、少しずつ着実に広がっていってほしいと思う。

これは、今から約七年前、サロンでの活動を始めてまだ間もないころの私が書いた何げない文章です。引越しにあたり、あれこれと書類の整理をしていて、偶然見つけたセピア色の原稿用紙。荷物の間に腰をおろして読み進むうちに、あの頃の思いが鮮やかによみがえってきました。

今となっては、仕事やプライベートのいそがしさにかまけて年に数えるほどしか、サロンに顔を出すこともない自分ですが、サロン自体はこの頃と少しも変わりなく続いているのだということを、改めて感じています。私もまた、あの頃の＜がむしゃらさ＞を仕事や活動にもう一度、取り戻したいなあと思いました。

細くても、長〜くかかわらせていただきたいと思っています。

▒さろん文庫開設▒

多くの皆様より、＜サロン・あべの＞にご寄贈いただきました書物が沢山集まりましたので、この度、あべのボランティア・ビューロー室一隅に、「さろん文庫」を開設させていただくことになりました。

より、広く多くの皆様方にご利用いただけたらと希っています。

ここに、＜サロン・あべの＞が毎月発行しているサロン紙の合本（創刊号〜45号・46〜69号・70〜93号）三冊も揃えています。

★ 利 用 の し お り ★

○貸 出 し日＝月･金曜日午後1〜4時

○貸出し期間＝２週間（延長も可）

○場　　所＝あべのボランティア・ビューロー室

（大阪市阿倍野区帝塚山１－３－８

阿倍野区在宅サービスセンター内）

○問合わせ先＝TEL06-691-1028（冨田）

事前に連絡があれば毎月の出会いのときにも貸し出します。

震災に心を寄せて

辻本輝子

一月十七日未明、阪神・淡路を襲った震災は、人生にとって思いがけぬ事が起きました。

近代文明の今、交通、通信網の機能を遮断し、築き上げた家庭を崩壊し、五五〇〇人に達する尊い命を奪い、町の焼失させた大惨事です。この天災で数多くの被災者が出、中でも身動きのまゝならぬ障害者の避難生活は困難なので、危険を承知で我家の生活を余儀なくされ、食物もなく恐怖の数日を味わったとの事。この時に、今起りつゝある正確な情報が手に入っていればと、弱者への市町からの救助発進が、早急に届いていればと思いました。

この震災で素早く近隣の助け合い、心のふれあいで多くの人が救われ、支援の輪も全国から拡がり、人と人の素敵な出会いが励ましとなり、がんばれたと思います。

震災から二ヶ月半、復興の足音は着実に響いていますが、今もあまりに困難な生活をされている方を忘れず、健康を祈って支援を絶やさず送り続けたく思います。

サロン・あべの '94

☆平成６年度活動テーマ「カルチャー＆レジャー」　平成６年４月～７年３月

月・日・曜日	会場	毎月の出会い
94年 4・16・土	育徳コミュニティー・センター2F研修室	「障害者スポーツとしてのスクーバーダイビング」 パネラー＝中塚茂巳氏（ＪＵＬＩＡ・ＨＡＳ・ＪＡＰＡＮ代表）
5・21・土	早川福祉会館	「大阪市立早川福祉会館」見学会
6・18・土	育徳園・３Ｆ幸分ホール	「さろん寄席」 ゲスト＝田渕美登利さんらパンセ羽衣寄席のみなさん
7・16・土	育徳コミュニティー・センター2F研修室	「障害者基本法」のあらまし－これからの展望と「障害者支援新長期計画」－ パネラー＝北野誠一氏（桃山学院大学社会学部助教授）
8・7・日	あべのカーニバルなんでも市	「さろん亭」開店
9・17・土	育徳コミュニティー・センター2F研修室	「阿倍野郷土史」 パネラー＝猿田　博氏（阿倍野区名所旧跡顕彰会会長）
10・15・土	阪堺線 聚楽通駅～浜寺公園駅前	「チンチン電車で行く、住吉・堺」 沿線説明　＝猿田　博氏（阿倍野区名所旧跡顕彰会会長）
11・19・土	育徳コミュニティー センター2F研修室	「海外旅行のすすめ」 パネラー＝中田　治氏・許　純子氏（アロハセブン大阪支店）
12・3・土	育徳園３Ｆ幸分ホール	「赤とんぼと過ごす、ロマンチック・クリスマス」 ゲスト＝フォークグループ赤とんぼ3名・アメリカの留学生４名
95年 1・21・土	ホテル・エコー・９Ｆラウンジバーク	「和やかに集う　サロンの新年会」
2・18・土	育徳コミュニティー・センター2F研修室	「さをり織りと障害者」 パネラー＝城　みさを氏（さをりひろば代表）
3・18・土	育徳コミュニティー・センター2F研修室	「サロン井戸端会議」 ～フリートーク「あなたが主役」～

◎その他の活動

□＜サロン・あべの＞紙毎月第３土曜日発行
□毎月の広報活動…アベノ・タウン紙、朝日新聞、産経新聞、毎日新聞、読売新聞、他
□　第２２回大阪府社会福祉協議会広報紙コンクール「佳作賞」受賞
□海外文通…アメリカ=Ｐａｔｔｉ　Ｔｒｕｃｋｙ，イギリス=Ｍａｒｇａｒｅｔ　Ｂｏｗｌｅｒ
　　ドイツ=Ｂｒｉｇｉｔｔｅ　Ｅｈｒｅｎｂｅｒｙ，韓国＝馬　泰植
□平成６年度大阪市ボランティア活動振興基金助成金交付決定
□＜サロン・あべの＞出会い百回記念講演「障害者基本法」のあらまし（平成６年７月16日）
□＜サロン・あべの＞紙１００号記念誌発行（平成６年10月15日）
□サロングッズ［絵葉書２種（風景・花だより）、一筆箋］の制作・販売
□「阿倍野区名所旧跡いろはがるた」冊子（解説書付）発行

作る　つくる　創る

河合恵子

羽衣とイチゴ

地震の後、なかなか瓦礫の片づかない町にもいつもの年と同じように梅は咲き、桜も美しい薄紅色の花の衣をつける。自然の営みのスケールの大きさの前、人はただ、あたふたしているように感じます。

春霞。たなびきにけり久方の。月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは春のしるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹き閉じよ。おとめの姿。暫し留まりて。この松原の。春の色を三保が崎。清見潟富士の雪いづれ春の曙。

これは漁夫白龍が見つけた羽衣を返すかわりに天人に舞いをまってもらうという有名な謡曲「羽衣」の一節。現在も静岡県清水市の三保松原の御穂神社南東には羽衣を掛けたという松があります。この有度浜から駿河湾を越して雲に浮かぶ富士はとても優美。富士を望みながら、遙かに続く砂浜に佇んでいるとタイムスリップして天女に会えるかも・・・

近くの久能山は一六一六年徳川家康を葬むったところ。翌年、日光に改葬されたが、山頂の東照宮まで、日本平からバスやロープウェイをつかって簡単にのぼることができます。さて、そこから目の前に海を見ながら急な石段を下りるとビニールハウスがまるでワニかヘビのように山と海の迫る狭い空間に張り付いている。これは有名な久能山の石垣イチゴ。階段状に積み上げた石垣の間に植えると太陽熱で生育が早く、また、たくさん栽培作出来るというが、いまはコンクリート製の段々。ビニールハウスのなかは甘い香りに包まれています。おみやげには生のイチゴ、ジャム・ワイン・アイスクリームなど。イチゴのたくさん出回る季節、電子レンジで手早く出来るジャム作りはいかがでしょう？

20

★ 両手をみつめていると

小さなころ、なにとはなしに手を見つめていたら、父から叱られた。父は「人間は死ぬときが近づくと手をみるようになる。だから手をみてはいけない」という。そして祖母が、やはり亡くなる前にじっと手を見ていたことを教えてくれた。

何年か前に死んだ叔父も、亡くなるまえ意識がはっきりしないまま、病院のベットの上で、いつまでも手を見つめていたそうだ。看病していた母は、叔父が手を見つめながら何を考えていたのか不思議に思ったという。

そういえば、両手を胸の前で組み、「この手の形で私は死んでいくのだ」と書いた詩がどこかにあった。冷たくなった手を、誰かが組んでくれる様子を、その詩は描いていた。

手はいちばん身近な私自身だ。私の身分証明書には私の顔の写真しか載せていないが、顔は写真や鏡をとおしてしか見たことがない。でも、手はちがう。いつも目の前にある。たえず触れている。臭いだってすぐにわかる。熱いか冷たいか、たちまちわかる。それに、いちばん自由に動かせる。こんなに思うように細かく速く動いてくれる私の一部はない。私のこれまでの大半の仕事をしてくれたのは、なによりもこの手だ。

しかし、もし、いろいろな手の写真を見せられて、どの手が私の手か当てみよと言われたら、自信はない。顔の写真なら、自分の顔を探せても、手の写真で自分の手を見つけることは難しいだろう。

それに、手がいちばん身近な私自身だとしても、手を失って私が無くなるわけではない。手が動かなくなっても自分が動かなくなるわけではない。手はそういう意味で、私自身ではない。

手は私の道具なのだ。ただし、ふつうの道具ではない。取り替えがきかないし、熱さも冷たさも痛さも柔らかさも感じる私自身である。道具であり、私自身でもあるのが手の不思議さだ。

死ぬということは、まずその手が冷たく動かなくなることだ。そして手は腐るまえに焼かれてしまう。焼かれてしまうのは、手だけではないのだが、いちばん身近な私自身である手が焼かれる様が最初に思いうかぶ。

死を前にして手を見つめる人は、手に別れを告げていたのかもしれない。いちばん身近な身体である手に別れを告げて、魂の器である自分の身体ぜんたいに別れを伝えていたのだろうか。

手をみつめていたから死んだのでは

なく自分を見つめる自然な気持ちとして手をみつめていたのだ。とすれば、これからまだ生きようとする私たちが手を見つめたっていいわけだ。

そばにいる若い人たちの手と自分の手をふと比べると、毎日、自分の手ばかり見ていて気がつかなかった、時間の傷あとが、くっきりと見えてくる。そして両手を触れ合わせれば、こんなにも危うい柔らかさや脆さのなかに私の生命（いのち）が流れていることに驚きさえ感じるのである。（知）

春は爛漫

阿倍野に住んでいる人も
前に住んでいた人も
住んだことのない人も
阿倍野に全然興味のない人も
今年の春は「阿倍野」です。
なにがなんでも「かるた」です。

解説付き　かるた冊子一五〇円

美智子のこんな話

岸田　美智子

重度女性障害者が裁判を起しました

昨年の暮頃、マスコミにも取り上げられていましたが、東京在住の重度女性障害者のA子さんが、裁判を起しました。

このA子さんは、二次障害が出てきたため、ある病院に診察に行きレントゲンを撮ることになりました。そして、レントゲン室でレントゲン技師の指示に従い、レントゲンを撮ろうとしました。この時、介護者も部屋から出て行き、A子さんと技師（男性）だけになってしまいました。この密室状態の中でA子さんは、レントゲン技師からレイプ的なことをされたそうです。

A子さんは、障害のため抵抗もできず、助けを呼ぶこともできず、この技師の思いのままにされてしまったそうです。こういう医療の場では、患者は医者のいいなりになり、衣服なども脱いだりするので、無防備・無抵抗になります。またA子さんは、障害があるのでまったく抵抗ができなかったその悔しさは測り知れません。収容施設の中でもA子さんと同じような体験をした人がいるのです。このような事件は、もちろんあってはならないことですが、今の状況の中では起こるべくして起こった気がします。異性介護が日常的にまかり通っています。女性障害者のトイレ介護や、お風呂介護などを男性職員が平気でやってしまっています。このような現実は、障害者の性を無視した介護のやりやすさだけを優先させた結果だと思います。

この事件は、今後いろいろな問題に広がっていくと思います。裁判はぜひ勝って欲しいと思います。

今回のA子さんの告発は、女性障害者も自分のからだや、生き方に自信を持ち、言いたいことが言えるようになってきた現れ

だと理解しています。

この事件のことを新聞で読んだある施設の女性職員の方の意見を掲載しておきます。

これからはこの職員がいうように入所施設の生活がよりよいものになっていけばいいなと思います。みなさんも自分の生活に結びつけて考えてみてください。

＊　＊　＊

施設の女性職員の意見

私は現在、施設の職員をしていますが、学生のときにボランティアをしていた頃から、今回の事件に類するような状況を耳にすることがありました。「重度障害者」の女性のトイレの対応や、入浴を男性がしている施設があるという事実、その上「子宮摘出」に追い込まれた人もいるという話や、今回のように直接の性暴力を受けた人もいるという話を聞くにおよんでは、物凄いショックと怒りを感じました。でも、子宮摘出や、性暴力の話は、過去の「辛い体験」としてようやく語ってくれたという状況でしたから、それ自体をどうすることもできず、私としては、そうしたことを絶対に許してはならないという事を頭に刻みこんでおくことしか出来ませんでした。

施設職員になって10数年。今、私が働いている施設では、開設当時（10数年前に開設）から、着替え・トイレ・入浴などは「同性介助」を徹底させてきました。

でも、このあたりまえともいうべき事柄が、行われていない施設もまだまだ多いという事と、「異性介助」を正当化する言い

おもろい　姉ちゃん

バレンタインチョコ

みなさん、バレンタインデーとホワイトデーは、いかがおすごしでしたか？

ちょうど2月14日は、わがつくし組は近所のスーパーでの買い物の日だったため、ミーハーな私は、

「今日は、バレンタインよ。好きな人にチョコあげる日よ。チョコ買いやー」とチョコレート業者の廻し者と化したのです。

私のかわいい担当Hさん（47歳）は、何と看護婦さんにチョコレートを選びました。過日、風邪のため作業科の外出に置き去りにされたHさんに、優しくコーヒーを入れてくれた看護婦さんの親切を、彼女は忘れていなかったのです。

そして、3月、生まれて初めてバレンタインに女性から、チョコをもらった女性から、

「ホワイトデーには、何を返せばいい？」などという相談を、私は生まれて初めて、もちかけられたのでありました。

田渕　美登利

訳として、「施設職員は介助の専門家であるから、何でもできなければならない。仕事なんだから」と言われてしまう現実もあることに大きな問題を感じてきています。「重い障害のある」人達が、「明確に嫌だ！」と意思表示ができなかったり、「介助―被介助」の関係性で遠慮してしまったりしていることをいい事に、人権を侵害する「介助」を仕事としてやってしまって良いわけはないと思います。

11月13日の集会で、今回のA子さんに対する性暴力が、「性的に弱い立場に置かれている人」「被害を訴えられないだろうという人」「訴えても信用されにくい人」とみなした上で行われたというお話がありました。全くその通りだろうと思います。

そして、今回の事件をうみだした背景、土壌が私たちの日常に存在する事をしっかり押さえていかなければならないと思っています。

私としては、A子さんが自らのプライバシーをさらけださざるをえなくなった、そして、さらけだしてまで告発した今回の問題の持つ意味を、女である自分自身の問題として、また施設現場で働くものとして考えつゝ、現状を少しでも変える力としていきたいと思っています。

感謝します

カンパ、お菓子、バザー用品、冊子等のご寄贈。一筆箋、絵葉書等、お買い上げありがとうございました。

お礼を申し上げます。

大北清子、大塚一枝、木村峰子、
窪田新一、坂井柾予、鈴木三佐子、
田中美佐保、町野旬子、永堀厚子、
藤田和子、丸山浩二、丸山寿美子、
吉田幾俊、（匿名三名）

○三月のカンパ　金一四、○○○円

「高齢者と在宅介護」はお休みします。

お知らせ

サロン・あべの五月の出会い

『阿倍野区在宅サービスセンター』見学会

日　時　五月二十日（土）午後一時

場　所　阿倍野区在宅サービスセンター前
（阿倍野区帝塚山一―三―八
☎〇六―六二八―八一八一）

現地集合

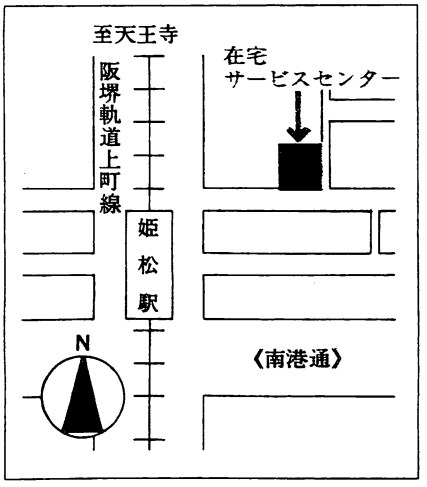
会　費　なし

この四月にオープンしたばかり。地域における高齢者福祉の新拠点を見学します。

参加人数を確認しますので、冨田まで、事前にお申し込みください。

お申し込み・お問い合わせ先

☎〇六―六九一―一〇二八（冨田慶子）



サロン隣組ニュース

■「サロン淀川」

○サロン淀川４月の出会い

日時‥４月１６日（日）
午後１時３０分～３時３０分

場所‥淀川区民センター４階講習室
［大阪市淀川区野中南2-1-5
☎06-３０４－９１２０］

内容‥「障害者とボランティア」
ボランティア活動について、「する側」と「される側」について考える。

講師‥横須賀　俊司氏
（関西学院大学非常勤講師）

会費‥なし

問い合わせ先‥☎06-３０６－２９００
大阪市淀川区社会福祉協議会
ボランティア・ビューロー

■「ウイズ東淀川」

○第６回「ウイズ東淀川の出会い」

日時‥５月２８日（日）午後２時～４時

場所‥東淀川会館（エレベータ・車いすトイレ有り）

内容‥「音が見えた」
中途失明者の音楽教師の現職復帰

講師‥三宅　勝氏

会費‥なし

問い合わせ先‥☎06-３４０-３０８２
（鈴木昭二）

朗読テープのご案内

山本敏子さんのご協力で、＜サロン・あべの＞紙105号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは39号から、105号の分があります。50号は、90分と60分の２本のテープに、100号は、120分テープ２本にそれぞれ収録されています。又、絵本「未知の記憶」（作・絵＝中川勝彦）の朗読テープもあります。

いずれもご希望の方には、ダビングをしますので、冨田までお申し出下さい。
（☎０６－６９１－１０２８）

編集後記 FROM EDITOR

井戸端会議に出れなかった人から「こんにちは！」って、手紙がきました。紙上で賑やかに加わってもらいました。サロンの一筆箋といえば、手紙かメモと、ひとつ憶えに思い込んでいましたが、ビデオテープのインデックスに使っている、やわらか頭の人が現れて、感心、そして歓心。あなた好みの、あなた流の新しい使い方をみつけてください。　（石）

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞Vol.106［`95. 4.15 発行］定価￥１００．
代　表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町２－１９－２－３０３　電話06-621-4365
連絡先；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６　電話０６－６９１－１０２８
表　題；井上憲一・筆　　文中イラスト；石田美禰子
印　刷；セルフ社〒546 大阪市東住吉区北田辺町４－２３－２ミスターＤビル２Ｆ
TEL０６－７１９－８２１２　FAX０６－７１９－８２１３

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）